THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES
親鸞仏教センター通信

2023年12月1日発行
発行者　本多 弘之
編集・発行　親鸞仏教センター（真宗大谷派）
〒113-0034　東京都文京区湯島２-19-11
TEL. 03-3814-4900　FAX. 03-3814-4901
e-mail　shinran-bc@higashihonganji.or.jp
ホームページ　http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp
Facebook　http://facebook.com/shinran.bc
Twitter　https://twitter.com/shinran_bc

2023.12
第87号

勤行・阿弥陀仏・寂しさ

親鸞仏教センター研究員　**大胡 高輝**

親鸞仏教センターでは、始業時刻と終業時刻に、その日出勤している職員全員で仏間に集まり、お朝事・お夕事をつとめることになっている。これまで宗門に属したことがなく、またそもそも生活リズムなるものとも儀式・作法の類全般ともほとんど無縁の日々を送ってきた私にとって、本年４月に当センター研究員を拝命して以来、日々の生活がこの朝夕の儀礼に枠取られ、明確なリズムをもつようになったことは劇的な変化であった。

けれども、この朝夕の儀礼の存在は、おそらく私の問題関心と直に結びつくものであったために、ごく自然に私のなかに浸透していった。私は現在、親鸞の著作の読解を通じて、その思考を、あるべき自他関係への希求に導かれたものとして辿り、「信」を、衆生たちの間に結ばれるある特異な関係としてとらえることをめざしている。こうした関心のあり方からすれば、人々がともに念仏を称え聖教の言葉にふれてゆく勤行の光景に私が慕わしさを感じるのは、たしかに当然のことだといえそうである。

ところで、以前、残業が長引いて施設内で一人になった日に、ふと思い立って誰もいない仏間に入り、お朝事・お夕事の次第を通しでつとめてみたことがあった。普段人々の集いの場となっている仏間が、一人でやってきた人間にどのような相貌を見せるのか、知りたく思ったためである。

その夜、仏間で一通りの次第を終えたあと、しばらくぼうっと仏壇正面にある阿弥陀仏の絵像を眺めていたのであるが、ある瞬間、四方に輝きを放ちながら重い沈黙を貫く、どこか悲痛さを感じさせる阿弥陀仏の姿が突然視界のなかで際立ってきて、私はその姿に強く揺さぶられた。そのとき私が受けた印象について、いまはまだうまく語ることができないが、直感的ないい方が許されるならば、あのとき、私たちの存在の根底に広がっている、何か深い寂しさのようなものが、あの強烈な光輝と沈黙とのなかで剥き出しになった、という感じがした。

親鸞の著作『唯信鈔文意』によれば、根源的存在としての仏は、「一切群生海の心」、つまり私たち衆生すべての心として世界に遍満する、一なるもの（「一如」）である。これはまだ予感なのであるが、ここでいわれているのは、私があの夜感じとった気がした、広大な寂しさのことなのではないであろうか。もしそうであるのなら、勤行とは、人々が、互いの間に結ばれるべき本来的な関係の回復を求めて、宇宙に遍満するその深い寂しさへと立ち返る営みである、のかもしれない。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「本願力回向の行信―『一念多念文意』を読み解く―」①

浄土に生まれるとは 本願を信ずるということ

親鸞仏教センター所長　本多 弘之

当センター所長・本多弘之による連続講座「親鸞思想の解明」は、今年（2023年）の1月から、親鸞の『一念多念文意』の講座「本願力回向の行信―『一念多念文意』を読み解く―」を親鸞仏教センターに於て開催している。ここでは、その第1回の一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員　越部 良一）

『一念多念文意』に、「『無量寿経』の中に、あるいは「諸有衆生　聞其名号　信心歓喜　乃至一念　至心回向　願生彼国　即得往生　住不退転」と、ときたまえり」（『真宗聖典』534頁、東本願寺出版、以下『聖典』）とあります。本願成就の文です。この「即得往生」について、次のように、親鸞聖人の独特の了解があるわけです。「「即得往生」というは、「即」は、すなわちという、ときをへず、日をもへだてぬなり。また即は、つくという。そのくらいにさだまりつくということばなり。「得」は、うべきことをえたりという。真実信心をうれば、すなわち、無碍光仏の御こころのうちに摂取して、すてたまわざるなり。「摂」は、おさめたまう、「取」は、むかえとると、もうすなり。おさめとりたまうとき、すなわち、とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまるを、往生をうとはのたまえるなり」（『聖典』535頁）。

現生正定聚ということの教義学の受け取り方は、ここに親鸞聖人がおっしゃっているような、往生を得るということは正定聚の位につくということだ、という意味にはっきりとなっていない。『無量寿経』自身が第十一願ないし第十一願成就文を通して、浄土の利益として正定聚に住するのだと言っている。このことを親鸞聖人は、浄土に生まれるということは、我々凡夫が本願を信ずるということなのだと。こういう形で明らかにしてくださろうとしているのです。

我々はそう教えられても、浄土に生まれたいと自分で願って自分で往けるのかと、どうしても自力でそう考えてしまいますから、そう考えてしまうと遠慮して、現生では凡夫なのだから、又、環境も浄土とは言えないのだから、やっぱりこの命が終わってから往くのだろうと解釈する。親鸞聖人が本願を信ずるということを徹底して教えてくださるのだけれど、本願の報土と教えられているにもかかわらず、それを死後の浄土と考えてしまう。これが、あれか、これかと分別する衆生のもつ病のようなものですね。でも現生でもう浄土だと言ってしまうとそれも間違いなのです。本願を信ずるときに本願の中にある、無限の中にある、即得往生とはそういう意味なのです。本願の大悲の中にあると信ずるわけですから。即得往生という意味はそういう意味なのであり、決して身が死んでから理想的な世界に往くというのではない。

親鸞聖人は『教行信証』の信巻に「前念に命終して後念にすなわちかの国に生まれて」という善導大師の文を引用されています（『聖典』245頁）。臨終という問題は、念仏の信心をいただくところに生の意味が転じられる。信の一念というところに、「時剋の極促」（『聖典』239頁）という意味がある。時剋の極促ということは、比喩的には臨終に譬えられて、苦しんだり迷ったりする命が完全に終わるという意味をもつ。こういうはっきりした信念が親鸞聖人におありだったのではないかと思います。だから、前念に「本願を信受」（『聖典』430頁）して、後念には得生する、それが信の一念の事実であるのだと。自分の努力や自分の条件で往けるのでなく、本願の内容として、それを信ずる。こういうことが言えてくるのではないかと思うのです。そのことを親鸞聖人はこの『一念多念文意』を通して、徹底しておっしゃるのです。

現代と親鸞の研究会

第71回

「わかりやすい救済」に抗うために
―リスク管理社会の人間観―

磯野 真穂 氏（人類学者）

2023年４月７日、人類学を専門とされる磯野真穂先生をお招きし、第71回現代と親鸞の研究会を開催した。「『わかりやすい救済』に抗うために―リスク管理社会の人間観―」と題された当日の講義では、主に医療人類学の知見をもとに、新型コロナ感染拡大の状況を踏まえつつ、現代の人間観について語っていただいた。当日の講義の一端を以下に記す。

（親鸞仏教センター嘱託研究員　田村 晃徳）

■医療人類学とは何か

皆さんにとって、「医療人類学」とは聞き慣れない言葉かもしれません。文化人類学の中の一分野ですが、その特徴を一言で申すならば、医療の「意味を扱う学問」となります。例えば、入道雲が出てきて雷が鳴るとします。これを雷様が太鼓を叩いているとか、あるいはヨーロッパでは怒ったゼウスが雷を投げている、などと理解します。科学的に言えばこれらは間違いです。しかし、なぜそのように捉えるのかといったように、意味の背景を探るのが医療人類学の大きな特徴です。医療の分野において、正誤だけではなく、「なぜ」の問いが可能になるのが、医療人類学の強みだと私は思っています。

■自分らしさを考える

「自分らしさ」という言葉をよく聞きます。しかし、この言葉が新聞などで広く使用されるようになったのは、平成になってからです。特に2000年代になり、より多く使用されるようになりました。その使用法を見てみると、思春期の悩みや就職活動、さらには老いや死についても「自分らしさ」という言葉が出てきます。ここまで全ての問題の解決に用いられる「自分らしさ」とは、一体何なのだろうと思いますよね。

■自分らしさの抱える矛盾

自分らしさとは、他者から強制されるものではないと考えられています。「他ならぬ『私』がその選択をしている」というときに、「自分らしさ」という言葉は用いられているようです。しかし、実際に他者など、周囲から何の影響も受けないことなど可能なのでしょうか。実は「自分らしさ」には、周囲は関係ないと言いつつも、社会的合意がとても重要なのです。これが「自分らしさ」が抱える大きな矛盾です。つまり、理想とされる「自分らしさ」は、自分だけではなく、周囲も評価してくれたときに可能となるのですね。

■３つの人間観

そこで「自分らしさ」を考えるためにも、現代の人間観を提示しましょう。それには３つあります。「個人主義的人間観」、「統計学的人間観」、そして「関係論的人間観」です。どれも大切な人間観ですが、先の２つの人間観が個人に基礎をおいて関係を考えるのに対して、最後の「関係論的人間観」は、まず関係があって個人があると考えるのですね。そしてこの「関係論的人間観」は仏教と非常に親和性が高いと思っています。実は、人類学者が書いた書物を読んでいくと、「個人主義的人間観」よりも「関係論的人間観」の方がより一般的であることがよく分かります。個人という概念や、「その人らしさ」を強調する社会はあまりありません。これらは極めて欧米の価値観が強く反映された人間観だと思うのです。現代の問題を考えるとき、個々人を過度に「アトム化」させない人間観が求められていると思います。

◇◇第８回◇◇
「清沢満之研究交流会」報告

世紀転換期の宗教思想運動Ⅱ
―近角常観･日蓮主義･哲学館―

開催趣旨

親鸞仏教センター嘱託研究員　長谷川 琢哉

清沢満之が主唱した「精神主義」は、彼のもとに集まってきた弟子たちとともに、雑誌『精神界』などを中心に展開された。精神主義の信仰は当時の若者たちを強く惹きつけ、様々な反応を生じさせた。そしてそのような現象は、精神主義に限定されるものではなかった。2021年に開催した第６回清沢満之研究交流会では、「無教会主義」を唱えた内村鑑三および、自身の神秘体験を「見神の実験」として発表した綱島梁川の信仰とその波紋という現象を世紀転換期の「宗教思想運動」としてとらえ、相互に比較検討することを試みた。

第８回清沢満之研究交流会では、その時の視点を維持しつつ、第６回では取り上げきれなかった他の同時代の宗教思想運動を取り上げた。求道会館を中心に活動した近角常観、多くの賛同者を生み出した日蓮主義、そして「新仏教」運動などさまざまな仏教改良運動の拠点ともなった私立哲学館。これら精神主義とも深い関係を有した、世紀転換期の宗教思想運動の検討を通じて、近代的信仰がどのような形を取り、どのように受容されたのかということを幅広く検討した。そして本交流会での議論を通じて、精神主義を同時代の運動の中に位置づけ、あらためてその特徴を浮かび上がらせることを試みた。以下、それぞれの発表要旨を報告する。

◆ 発表要旨

Ⅰ　近代仏教における「人格」の問題

碧海 寿広（武蔵野大学文学部教授）

「人格」は近代仏教のキーワードの一つであり、仏身論（三身説）や仏性論などと結びつきながら頻繁に用いられた。近角常観もまた、仏（阿弥陀如来）の実在性を語る際、この人格概念に依拠した。とはいえ、人格言説では一般に人格の「向上」が主張されるのに対し、近角は人間が自らの人間性を主体的に発達させる努力を否定した。こうした論調は、彼の修養言説に対する批判にも同様に見て取れる。近代日本において、人格向上を重んじる修養言説が活況を呈したが、近角は人格向上のために宗教や哲学に接近する態度を戒めたのだ。また修養による煩悶の解決を安易に求める態度もよしとせず、むしろ煩悶を深めるなかで自らの罪や悪を直視すべきことを強調した。近角は、向上主義的な修養言説に自力性を見て取り、それを乗り越えた他力の信仰を説こうとしたのである。彼のもとに集った学生たちの多くもまた、各種の修養実践の果てに修養を放棄して他力信仰に覚醒している。こうした近角の思想や実践からは、人格向上の追求ではなく、人格の「下降」を熟視することによる人間性の変容や探究としての、「真宗的人格」の実態と可能性を探ることが可能である。

Ⅱ　青年求道者たちと日蓮（主義）

ブレニナ・ユリア（大阪大学グローバル日本学教育研究拠点特任講師）

本発表は、「日蓮主義」という言葉から一般的に連想されるイメージとは異なるタイプの人物を取り上げた。従来の日蓮主義研究で注目される

ことのなかった、明治後期の青年求道者たちである。ほとんど無名の彼らは、田中智学が主宰した雑誌『妙宗』において、自身の悩みを吐露したり、信仰遍歴を赤裸々に語ったりしている。同誌には智学の門下たち（主に1870～80年代生まれの世代）も盛んに執筆している。そして総じて、「日蓮主義」という語や、「日蓮主義とは何か」といった問いに、特別にこだわっている様子はなく、むしろ日蓮遺文そのものに特別な意味を見出す者や、日蓮の人格に自身の理想を託す者など、とりわけ高山樗牛の没後、彼の日蓮論に触発された青年たちの熱烈な日蓮鑽仰が窺える。そこで本発表では一旦、主義を括弧に入れ、日蓮（主義）を媒介にした彼らの自己語りに焦点を当て、宗教思想運動の担い手・受け手の実態に迫ることを試みた。明治後期のいわゆる「煩悶青年」の宗教熱はよく指摘されているが、日蓮（主義）に惹かれた青年たちの具体像は未だ知られていない。本発表では、こうした青年たちによる誌上の信仰告白を検討し、同時代における求道とメディアを取り巻く環境の変化の重要性を指摘した。

Ⅲ　哲学館と仏教改良運動

長谷川 琢哉（親鸞仏教センター嘱託研究員）

本発表では、世紀転換期の「宗教思想運動」の一つとして、井上円了が創設した私立哲学館を取り上げた。発表者は近年、「仏教改良」という視点から円了の思想と行動の全体を統一的に理解する研究をすすめているが、哲学館は円了の仏教改良において重要な位置をしめた教育機関でもあった。一言でいえば哲学館は、哲学を中心とした「普通学」を教授しつつ、「出世間」に偏った仏教を「世間」（社会）へと向ける仏教者・僧侶を養成する超宗派的な学校という側面をもっていた。実際、哲学館出身者の中には、近代日本において際立った活躍をした仏教者が少なくない。本発表では、こうした観点から哲学館全体をゆるやかな「宗教思想運動」としてとらえ、出身者たちが円了の仏教改良の企みをどのように受け止め、展開したのかを概観した。その際、特に注目したのが、出身者たちの活動と既存教団との関わりである。円了自身の仏教改良案は、既存の宗派を存続させつつ、教団の枠組みにとらわれずに活躍する僧侶を育てることで、現在の日本仏教の全体を間接的に改良することを目指した。他方で「哲学館閥」の強かった「新仏教」運動は、円了の仏教改良の方向性を受け継ぎながら、既存教団を否定した「新しい仏教」を目指したものだった。またそれに対し、哲学館（東洋大学）の学生らによる「東洋大学真宗会」は、教団との関わりを維持しつつ、哲学館・東洋大学の特徴を際立たせるような自主的な活動を行っていた。このように、既存教団との関わりを軸として、哲学館の多様な仏教改良運動の多様なひろがりを本発表では提示した。

左：赤江 達也（関西学院大学社会学部教授）
右：繁田 真爾（親鸞仏教センター嘱託研究員）

全体討議では、繁田真爾嘱託研究員によるコーディネイトのもと、コメンテーターの赤江達也氏（関西学院大学社会学部教授）により詳細かつ充実したコメントがなされ、多岐にわたる論点が丁寧に整理された。それを皮切りとして、参加者も交えた白熱した議論が行われた。その内容と本研究会の詳細については、2024年６月刊行の研究誌『現代と親鸞』第50号に掲載予定である。

業障重」というは、弥陀の願力は生死大海のおおきなるふね、いかだなり。極悪深重のみなりとなげくべからずとのたまえるなり。「倩思二教授恩徳一実等二弥陀悲願一者」というは、師主のおしえをおもうに、弥陀の悲願にひとしとなり。大師聖人の御おしえの恩おもくふかきことをおもいしるべしとなり。「粉骨可報之摧身可謝之」というは、大師聖人の御おしえの恩徳のおもきことをしりて、ほねをこにしても報ずべしとなり。身をくだきても恩徳をむくうべしとなり。よくよくこの和尚のこのおしえを御覧じしるべしと。

《訳　註》

「倩思教授恩徳実等弥陀悲願者」「粉骨可報之摧身可謝之」：この二文は、親鸞が冒頭に掲げる「聖覚和尚の銘文」の中には見られないが、銘文の典拠である『聖覚法印表白文』の中に、「聖覚和尚の銘文」の続きの箇所として示されている。

むことがあろうか、と思いなさいというのである。「生死大海之大船筏也 豈煩業障重」とは、阿弥陀如来の本願のはたらきは、「生死」という迷いの苦しみとしての大海原を渡らせる大いなる船、筏なのである。「極悪」すなわち、「煩悩具足の凡夫」として悪が深く重い我が身である、と嘆き絶望する必要はないとおっしゃっているのである。「倩思教授恩徳実等弥陀悲願者」（つらつら教授の恩徳を思うにまことに弥陀悲願に等しき者）とは、師主・源空（法然）聖人の教えを想い起こすに、それは阿弥陀如来の大悲の本願に等しいというのである。「大師聖人（源空聖人）」の御教えの恩恵は重く深いことをよくよく心得ておくべきだというのである。「粉骨可報之摧身可謝之」とは、「大師聖人（源空聖人）」の御教えの恩徳の重いことを知って、骨を粉にしてでも、報ずるべきだというのである。我が身を摧いてでも、その恩徳を報いるべきだというのである。この聖覚和尚の、この教えの文を十分にご覧になって、知っておかなくてはならない、ということである。

現代語化をめぐって

聖覚の銘文に見られる「煩業障重」という言葉、「業の障りが重いことを思い悩む」という意味内容を持つ言葉を、親鸞は、「極悪深重のみ（身）なりとなげく」という言葉で受け直している。特に、「極悪」という言葉は、親鸞がこの箇所にあえて入れてきた、注目すべき言葉なのではないだろうか。

親鸞は、関東の門弟方に宛てた書簡に、「凡夫はもとより煩悩具足したるゆえに、わるきものとおもうべし」（『聖典』五九四頁）と記し、仏法に照らされた自覚の言葉である「煩悩具足の凡夫」の意を「悪」、「悪人」として押さえている。そういう「悪」とここで言う「極悪」とは、ちがいがあるのだろうか。「極悪」と聞いて思い出すのが、「極楽」、すなわち阿弥陀如来の本願成就の浄土である。その「極楽」は相対的なものではない。同じように、「極悪」も「比較を絶した悪」ということなのではないか。人間の構造そのものとしての悪、普遍的な悪、人間存在が宿す根源的な悪を意味するのではなかろうか。この銘文の文脈から言っても、「無明長夜」と「生死大海」を踏まえて、「極悪深重のみ（身）」という言葉は表現されているのである。

それを受けて、聖覚の銘文に親鸞自らが、わざわざ付け加えて解説している「粉骨可報之摧身可謝之」という一文が出てくる。ここに変わり目・展開があると思われる。つまり、「極悪深重」の者が、骨を粉にしても身を摧いてでも、恩を返すという文脈になっているのである。そこに一体、何が起きているのだろうか。「恩徳讃」の源流と見られるものに、善導大師の教えがある。その主著『観経疏』「序分義」には、舎利弗や目連等、元外道であった仏弟子方は皆、かつて、自らの邪見によって苦しみの深淵に沈んでいたところを、仏陀釈尊の慈悲によって、教法によって、救い出された。それが、報恩の志の原点になっているのだという旨の善導大師の受け取りがある（『真宗聖教全書』一、四六七頁取意）。その意が、ここに重なっているように思われるのである。

親鸞には「悪を転じて徳を成す」（『聖典』一四九頁）という思想がある。「極悪深重」の者として、「如来大悲の恩徳を報いる」とは、本願の名号を信受することを通して、如来のはたらきによって、自身において「悪を転じて徳を成就する」生き方が始まるということだと解釈することができる。そのようにこの銘文の意を受けとめたい。

聖典の試訳（現代語化）

『尊号真像銘文』末巻 ⑨

「聖覚和尚の銘文」3／3

問題提起

親鸞が信頼した先学、聖覚の銘文の第三段落を取り上げている。その親鸞の解説文のところに、親鸞が作った『正像末和讃』の一首、いわゆる「恩徳讃」の元となる文が現れる。聖覚が元の『聖覚法印表白文』で、「粉骨可報之摧身可謝之」と表現した漢文を、親鸞は、「大師聖人の御おしえの恩徳のおもきことをしりて、ほねをこにしても報ずべしとなり。身をくだきても恩徳をむくうべしとなり」と解説している。

親鸞はここで、「報ずべし」、「むくうべし」と、「報」の字のみを解説し、「謝」については言及しない。これはどういうことなのだろうか。そもそも「報謝」というのは、感謝とはちがい、ありがとうの気持ちを表すだけでは済まず、恩を受けて有難いと感じたならば、目に見える形で恩返しをすることである、と言われている。また、「謝」には、「謝罪」のように「自分のまちがいであった。申し訳ない」という意味もあり、「感謝」のように「ありがたい」という意味もある。親鸞の言う「報謝」には、「迷い苦しむ自分自身を救っていただいた」という謝意が、大前提になっているのではなかろうか。その上で親鸞は、「謝」ではなく「報」の方に力点を置いているのだと推察する。

現在も使われている「恩に報いる」という言葉には、恩を受けた相手に相応のことを返すというニュアンスがあるように思われる。しかし、その内実がおざなりになれば、いわゆるギブアンドテイク、取引の発想と変わりはない。もっと言えば、縛りになりうる。「恩を受けたのだから、身を粉にしてでも、骨を摧いてでも、相応のことを返さねばならない」ということになると、支配被支配の関係に転落し、宗教的な抑圧を強いることにもなりかねない。

親鸞の言う「恩徳を報いる」とは、法然の御教えを如来大悲の本願に重ね合わせた恩徳、すなわち、「如来大悲の恩徳を報いる」ということなのであろう。そこには、師・法然の教化の恩徳に謝念を捧げつつ、むこう側・如来から授けていただいたものをお返しするという位置があるのではないか。その時、恩を返す相手は、直接、恩を受けた対象には限らない。具体的に言えば、親鸞は「知恩報徳」（東本願寺出版『真宗聖典』〔以下、『聖典』〕、二〇三頁）を念頭に、『教行信証』『正信偈』を製作している。要するに、還元しているのだと思われる。自身の救いを元に返して確かめる。そのこころが、縁ある人々にも相続されることになっているのではないだろうか。

親鸞がここで、「恩徳をむくうべし」と言う時、聖覚が表現した「可報」の「可」の字を受けている。つまり、その「べし」は、単に義務や強制的なものというのではなく、「恩返しをするものに成れる」という可能性の意として捉えることもできるだろう。そこに、親鸞自身の根源的意志がはたらいているのを感じるのである。

（親鸞仏教センター嘱託研究員　菊池弘宣）

【原文】

法印聖覚和尚の銘文

（中略）※中略部分は『親鸞仏教センター通信』第八四号、第八五号に掲載

「誠知 無明長夜之大燈炬也 何悲智眼闇。生死大海之大船筏也 豈煩業障重。」

略抄

「誠智 無明長夜之大燈炬也 何悲智眼闇」というは、誠知は、まことにしりぬという。弥陀の誓願は無明長夜のおおきなるともしびなり。なんぞ智慧のまなこくらしとかなしまんや、とおもえとなり。「生死大海之大船筏也 豈煩

【現代語】

法印聖覚和尚の銘文

（中略）※原文参照

「誠知 無明長夜之大燈炬也 何悲智眼闇。生死大海之大船筏也 豈煩業障重。」

略抄

「誠智 無明長夜之大燈炬也 何悲智眼闇」とは、「誠知」とは、いつわりなく知ることができたというのである。阿弥陀如来の誓願は、無明の暗く長い闇夜を照らす大いなる灯火である。どうして智慧の眼がくらいと言って悲し

親鸞仏教センター研究員と学ぶ公開講座 2023

参加者募集中！

2023年度は、５名の研究員がそれぞれの研究分野に応じて全７回の講座を開催致します。

仏教・歴史・教育・社会学など様々な切り口から、テクスト（文献）を読むこと、コンテクスト（文脈・背景）を捉えることについて、参加者の皆さまとともに学んで参りたく存じます。

■道徳・倫理の教科書を読む

期日：2024年２月６日（全１回）
担当：徳田　安津樹（とくだ あつき）
テクスト：随時指定

■『教行信証』を読む
—自他関係をめぐる思考—

期日：2024年１月９日、16日（全２回）
担当：大胡　高輝（おおご こうき）
テクスト：親鸞『顕浄土真実教行証文類』

■幕末・明治の天文学書をよむ
—国学者の宇宙とお坊さんの宇宙—

期日：2024年２月13日（全１回）
担当：古畑　侑亮（ふるはた ゆうすけ）
テクスト：井上淑蔭『国学徴』
佐田介石『須弥地球孰妄論』

■宗教教誨の歴史を学ぶ
—教誨師の声を手がかりに—

期日：2024年１月23日、30日（全２回）
担当：繁田　真爾（しげた しんじ）
テクスト：随時指定

■宗教のリアリティを捉える
—ロバート・ベラーの「象徴的実在論」—

期日：2024年２月20日（全１回）
担当：宮部　峻（みやべ たかし）
テクスト：Robert N. Bellah, “Between Religion and Social Science”

■日　時：いずれも火曜日18時～19時30分

■参加費：無料

■会　場：オンライン
（Zoomミーティング）

■お申し込み：
親鸞仏教センターホームページ
（http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp/）
の特設ページ「研究員と学ぶ公開講座2023」の
Googleフォームよりお申し込みください。

親鸞仏教センターの動き

（2023年４月～10月—抄出—）

本多弘之所長による連続講座「親鸞思想の解明」が５回、加来雄之主任研究員による定例講座「『歎異抄』思想の解明」が５回行われた。

４月７日には、第71回現代と親鸞の研究会を開催した。「「わかりやすい救済」に抗うために—リスク管理社会の人間観—」をテーマとして、磯野真穂氏（人類学者）に日本の医療現場への違和感から「自分らしさ」の桎梏まで、縦横に論じていただいた。６月17日には、第８回清沢満之研究交流会を４年ぶりに求道会館で開催した。オンライン参加を含め多くの方にご発言いただき、これまでの交流会を振り返りつつ今後の清沢満之研究のあり方について展望する機会となった。以上の研究会の概要については、本誌今号に掲載している。

８月24日には、三浦真証氏（龍谷大学非常勤講師・浄土真宗本願寺派輔教）をお招きして、「近世真宗教学の課題—特に成立期を中心として—」をテーマに近現代『教行信証』研究検証プロジェクトの外部講師招聘研究会を開催した。概要については、本誌次号に掲載予定である。